

リレー随想

結婚式の会場として申し込んだ、九品寺の労働会館を下見に行った。実際会場に足を運んで、人の流れや受付の位置を確認しよつと思つたのだが、結論からいえば、徒勞であった。

私が王名の伊倉といふところの出身で、そちらの教会で式を挙げ、急いで熊本に戻つてきて、一時から最初の披露宴であった。会場に戻つたときには、実行委員の人たちがあわただしく動いており、受付位置の場所など、前もつて私が考えていた段取りとは、少し違う方向で動き出していた。

会場に着くなり、メンバーの一人から「後のことは私たちに任せて、あなたたちはしばらく休んでいなさい」と、控室に案内された。この結婚式のため、何度も実行委員会を開いたが、控室を用意するなど、全く頭になかった。心配りというのは、ありがたいものである。

アルコールなしの披露宴で、

一回目

土地家屋調査士

田口 一法さん



よ」と、私たちの肩をポンとたたいてくれた。

招待客が三百人近くと人数が多いので、披露宴は一時からと四時からの、二回に分けてある。一回目と二回目とは、司会者も交代する。

Tさんは、一回目の司会をしてくれることになってしたが、エプロンもせずに会場をかけずり回ってくれていた。私も上着を脱いで、準備に加わろうとしたが、受付が始まったので、当事者はここにははいけなさと、控室に戻された。

一回目の披露宴が始まった。乾杯を、家内の元上司にお願ひした。定年を迎えておられたが、とても素晴らしい人で、何よりも「場をきりつと引き締めてくれる人」なのだぞうだ。紙コップにジュースを注ぐと元上司は「こういう結婚式を計画された、実行委員の皆様には敬意を表します」と、言葉少なに首頭をさつてくれた。

その言葉を聞いたとき、「ひよつとしたらこれは、いい結婚式になるかもしれない」。何かしらそんな思いが、チラッと頭の中をよぎっていった。

(熊本市花園、46歳)

代わりにコーヒーと紅茶を用意した。手伝いをお願いした喫茶店のマスターは「こんなにコーヒーを淹れたのは、初めてだよ」と、各テーブルに並んだポットを指さして「いい結婚式になる